

N1 à N2 における à の機能と意味構造 —N1 avec N2 との対比を通して

梶原 久梨子 (大阪大学)

本発表は、複合名詞 N1 avec N2 と競合する N1 à N2 (avec 型 N1 à N2) の構造と、その場合の前置詞 à の機能について検討する。先行研究では、このような N1 à N2 について、「à は N2 を N1 の本質的性質として提示する」(Anscombre1990)、「à は N1 の下位クラスを構築する」(Cadiot1991)、「à には属性を示す機能がある」(Cadiot1993)、「avec は自律した実体の共存であるのに対し à は統合的に捉える」(Schapira2005) と指摘され、いずれの見解も直感的には妥当であるように思われる。しかし、なぜ名詞句<N1 à N2>において、à が avec と競合するかということは、管見の限り明確にはされていない。本稿では、次の 2 点を明らかにすることを目的とする。

RQ①< N1 à N2>と< N1 avec N2>が成立/不成立する条件及び両者の意味的差異

RQ②< N1 à N2>における à の機能

まず N1 à N2 の関係や性質から、外発的特徴型、内発的特徴型、一時的特徴に分類する。

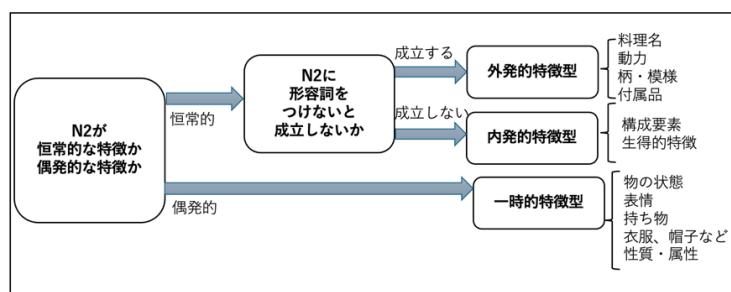


図1. 本発表で扱う N1 à N2 の分類

外発的特徴型の例 : glace à la vanille, moulin à vent, robe à fleurs, instrument à cordes など。

内発的特徴型の例 : maison au toit rouge, pull aux manches longues, garçon aux yeux bleus, femme aux cheveux blonds など。

一時的特徴型の例 : voiture aux vitres ouvertes, fille au sourire radieux, fille au chapeau rouge など。

RQ①について、分類したタイプごとに、N1 à N2 と N1 avec N2 の交替可能性およびそれが現れる文脈の違いを検証する。N1 à N2 は識別的な文脈で、N1 avec N2 は説明的な文脈で現れやすいことを指摘する。識別的とは、N1 の集合から当該の N1 を同定することであり、説明的とは、N1 の特徴や状態の情報を与えることを指す。

次に RQ②に関して、非飽和名詞と飽和名詞の例を取り上げ、à は文脈上非飽和的に捉えられる N1 を飽和化する操作に寄与すること、avec は飽和的な N1 に説明を加えていることを述べる。

最後に、à が上記のような識別的・飽和化機能を担うことについて、à の空間的用法 (Je suis à Osaka. J'habite à Paris.) に代表される、定位機能の帰着であることを示す。

主要参考文献 : Anscombre J.-C. (1990), "Pourquoi un moulin à vent n'est pas un ventilateur", *Langue Française* 86, 103-125. / Cadiot, P. (1991), "À la hache ou avec la hache ? Représentation mentale, expérience située et donation du référent", *Langue française* 91, 7-23. / Cadiot, P. (1993), "À entre deux noms : vers la composition nominale", *Lexique* 11, 193-240. / Schapira C. (2005) "La formation du tout : à entre-deux noms", : *Scolia : Sciences Cognitives, Linguistiques et Intelligence Artificielle* 19, Du rapport partie/tout en linguistique de corpus : varia, 93-105.